
Rinaria

都築景斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R i n a r i a

【Nコード】

N 4 8 1 1 L

【作者名】

都築景斗

【あらすじ】

私は、恋をしました。

ずっと、憧れていた恋を。

けれど、どうしてでしょう。

どうして、私は彼女を好きになってしまったのでしょうか…？

※注意

ピュアな恋愛ですが、女子↓女子です。

苦手な方は閲覧しないようお願いします。

(前書き)

まともな恋愛を書こうとした結果がこれです。

…なぜに？

途中で無理だと思った方は、
早々に他の素晴らしい作品を読まれることをおすすめします。

もし、恋をするならば、それは甘く、幸せな気持ちを与えてくれるものだと思っていた。

＋＋＋＋

「ねえ、香奈。今日帰りにカラオケ行かない？」

茜。

私の大事な大事な、親友。

ふわふわした髪。薄化粧の色白の肌。まんまるな瞳。私が憧れた「女の子」そのもの。

かわいい、私の自慢の親友。

「うん。いいよ」

かわいい、茜。

そんな、彼女に、

——私が寄せているのは、親友以上の……情。

＋＋＋＋

茜を、大切な親友をそんな風に見たのは、いつからだろう？
茜が他の子と仲良さげにいるのを、苛立たしく思ったのは？

その思いは、少しずつ私の中に溜まり…大きくなっていたのだろう。

そして、

「あのね、香奈。私、好きな人ができたの…」

その言葉に、告白に嫉妬に燃える心に、自分が彼女に抱いていたキモチに気づいた時には…、

——もう、後戻りできぬほど、私を侵していた。

ねえ、茜。好きだよ、大好き。私だけを見るように、捕えてしまいたいほど。他の人に視線を向けられないように。一分一秒でも長く、一緒にいたい。二人つきりでいたい。親友なんかじゃ、物足りない。

でも、わかっている。

わかっているんだ、こんなのキモチ悪いだけ、なんだって。だって、普通じゃない。当たり前、じゃない。

どうして、なんだろう。

どうして、茜なんだろうね。

普通に恋したなら、茜と気持ちを共有できたのに。

幸せな、キモチになれたのに、ね…。

笑う茜を見ると、私も嬉しくて、泣く茜を見れば、胸が引き裂かれそうで、怒る茜を見れば、それすらもかわいいと思えて、ただ、茜を見ているだけで、私は満足で、いつだって、その姿を探してる。

ああ、茜、好きだよ、本当に好き————ごめんね。

「ねえ、香奈ってさ、好きな人いないの？」

「んー、まだそういうの興味ないんだよねー」

嘘。いるよ、好きな人。茜が、いるよ。

「香奈ってさ、私に甘くない？助かってるからいいけど」

「小さいころからの親友だもの、当たり前だよ」

嘘。好きな人の為なら何でもしたいだけ。

「香奈、宿題教えて。今日当たるのに、全然やってないっ」

「しょうがないなあ、今回だけだよ」

嘘。もっと、私を頼って。もっと、私を必要として。

「私、香奈のこと、好きだよ。当たり前じゃん」

「ありがとう、私も茜が好きだよ」

嘘。だって、茜と私の好きはちがうとわかってるのに。

カラ、と教室のドアを開ける。

S H Rもとつくに終わった時間帯。外から聞こえる声が遠く響くだけで、校舎の中はひどく静かだった。

夕暮れ色に染まる教室内、どこか切なさを搔き立てるその色が、昔から好きだった。薄く闇に浸食された、色。

そんな中、机に突っ伏す影――茜、だ。

先に帰っていいって、言ったのに…。

そう思いながらも、口は緩やかな弧を描くのが自分でもわかる。

嬉しい、ただ嬉しくてたまらない。

なるべく音をたてないように近づき、覗き込む。

安らかな寝息を立てる顔は、昔と全く変わっていなくて…どこか安堵した。変わらないものが、あることが、また嬉しい。

する、とふわふわとした髪に指を通す。きちんと手入れされているからか、絡みもなく指通りはいい。

本人が起きないことをいいことに、何度も何度も、それこそ指先がその感覚を覚えこむほど、繰り返し髪を梳く。

起きてほしい。早く起きて、あの声で私を呼んでほしい。

でも、起きないで。この至福の時間が少しでも続いてほしい。

ああ、でも、起きて。いや、やはり起きないでいて。

相反する思いがせめぎ合う間も、指は茜の髪を弄びつづける。

こうしているだけで、幸せになるなんて、我ながら単純すぎるけれど、けれど笑えない。

この恋の果てに待つのが「ハッピーエンド」じゃないのが、わかっているから。

そう思えば、苦しくてたまらないのに、忘れてしまおうと思うのに、茜の笑顔を見るたびに、名前を呼ばれるたびに、好きといわれるたびに、幸せになって——また叶わぬ恋路に戻る。淡い望みを心の支えにしよう。

何度も、何度も、繰り返し抜け出せないまま…。

ループの中で、何度も何度も

この恋からの、「脱走」と「回帰」を繰り返す。

そっと、掬った髪の一房。いつか、私じゃない誰かが、これに触れる日が来るのだろう。それを、想像するだけで苦しい。

そっと、その髪に、茜の一部に——口づける。

茜、好きだよ、大好き。

あなたがその真意に気づかなくても、何度も言うよ。

それだけしか言えないから。

「愛している」なんて、言えないから。

その代りに、何度でも「好き」と「大好き」を繰り返す。

でもね、茜。

「愛している」と囁こうとする口に蓋はできても、

——この淡い恋心に、蓋することだけではできない。

もし、この世に、カミサマがいるのなら、それは

——きっと、とても残酷なひとなんだろうね……

【リナリア——植物】

ゴマノハグサ科の多年または1年草。原産地は西地中海沿岸。季節は5〜6月。花の色は、赤、ピンク、黄、紫、紅、オレンジ、白。和名は「姫金魚草」。

花言葉

「私の恋を知ってください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n48111/>

Rinaria

2010年10月28日00時50分発行